

タイ語録音図書プロジェクトを通して見られた日本語母語話者の
タイ語文音読に関する課題と指導方法に関する考察

**Pronunciation issues of Japanese native speakers in reading
Thai sentences aloud and teaching methods for Japanese
through a Thai audiobook production project**

スニサー ウィッタヤーパンヤーノン (齋藤)

東京外国語大学 世界言語社会教育センター

Sunisa WITTAYAPANYANON (SAITO)

World Language and Society Education Center, Tokyo University of Foreign Studies

オラドン ケウプラスウートウ

タイ商工会議所大学 コミュニケーション学部

Oradol KAEWPRASERT

School of Communication Arts, University of the Thai Chamber of Commerce

アネッチャー グリンゲーソーン

タイ商工会議所大学 コミュニケーション学部

Anencha KLINKESORN

School of Communication Arts, University of the Thai Chamber of Commerce

はじめに

1. タイ語録音図書プロジェクト概要
 - 1.1. 経緯と実施方法
 - 1.2. 本研究への契機
2. 音声データ分析方法
3. 分析結果
 - 3.1. 音節レベル
 - 3.2. 表現力
4. 日本語母語話者へのタイ語文音読指導法に関する一考察
 - 4.1. 音節レベルでの指導法
 - 4.2. 韻律に関する指導法
 - 4.3. 重音節・軽音節

おわりに

キーワード : 外国語としてのタイ語教育、タイ語文の発音指導法、タイ語の韻律

Keywords : Thai language education as a foreign language, Teaching methods of pronouncing Thai sentences,
Prosody in Thai



本稿の著作権は著者が所持し、クリエイティブ・コモンズ表示4.0国際ライセンス(CC-BY)下に提供します。
<https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

要旨

本稿はタイ語録音図書プロジェクトで得られた音声データをもとに、日本語母語話者がタイ語文を音読する際に見られる傾向や課題を明らかにし、文章レベルでの発音の指導方法に関する考察である。音節レベルでの要素では、事前の想定よりも問題は少なかったが、一部の組み合わせにおいて、子音、母音、声調での傾向や課題が確認された。一方で、音節個々の発音は問題がない場合においても、文章としての発音となると聞きにくさが出現するケースが多くみられた。これは主に話しことばのタイ語としての区切りの位置や間の取り方やストレスの付け方などが不十分であるためである。これまで外国語としてのタイ語教育の中での発音指導においては、学習初期段階での音節レベルでの指導に重きが置かれていたが、タイ語文の音読能力の向上を効果的に図っていくためには、タイ語における韻律、特に重音節・軽音節に関する説明・指導を総合的、かつ段階的に学習カリキュラムや教材に織り込んでいくことを検討することが必要と考える。

Abstract

This study aims to reveal the tendencies and issues of Thai sentence pronunciation and investigate the teaching methods for Japanese native speakers by analyzing the audio data of a Thai audiobook co-production project. At the syllable level, although fewer mistakes arose than expected, some issues with the combinations of consonants, vowels, and tones occurred. Meanwhile, there were numerous cases in which their speech was comprehensible but was expressed awkwardly, even though the pronunciation of each syllable was correct, largely due to incorrect breaks, pauses, and stress when speaking Thai. Thus far, teaching Thai pronunciation has concentrated on syllable-level elements for beginning students of Thai as a foreign language. To improve learners' ability to pronounce Thai sentences, the prosodic structures of Thai, especially regarding stressed and unstressed syllables, must be taught comprehensively and gradually and must be incorporated into the curriculum and learning materials of Thai as a foreign language education.

はじめに

日本語母語話者のタイ語学習における発音の課題としては、無気音と有気音の対立、長母音と短母音の対立、声調、日本語では異音となる母音や末子音などが、峰岸 (2021) やウィッタヤーパンヤーノン (2015) で取り上げられ、それらの指導方法についても述べられている。これまでの日本語母語話者のタイ語学習者への発音に関する考察については、タイ語の発音を初めて身に付ける段階の学習者が主な対象で、内容としては音節レベルでの項目が中心となっており、文レベルでの視点のものは、まだまだ見られない状況である。本稿は 2021 年度にタイ商工会議所大学 (University of the Thai Chamber of Commerce、本稿では以降 UTCC) の学生と東京外国語大学 (本稿では以降 TUFU) の学生との交流授業の中で実施した「録音図書プロジェクト」の音声データを活用し、タイ語文を発音する際に日本語母語話者に見られる傾向や課題を明らかにするとともに、その指導方法に関する考察を行い、今後の日本語母語話者向けのタイ語教育に資することを旨としたものである。これらの考察については、便宜上、本稿では以降「本研究」とも呼ぶこととする。なお、本稿中のタイ語の音韻表記についてはウィッタヤーパンヤーノン (2015) に従う。

1. タイ語録音図書プロジェクト概要

1. 1. 経緯と実施方法

「録音図書プロジェクト（本稿では便宜上、以降「本プロジェクト」とも呼ぶ）」は2021年度のTUFSのタイ語の授業、及びUTCCのSchool of Communication Arts（コミュニケーション学部）の授業それぞれのカリキュラムの中に組み込まれる形で、交流授業として実施されたものであるが、本プロジェクトのきっかけは前年度に遡るものとなる。2020年度は未曾有のコロナ禍の中で、オンラインツールを活用し、積極的にタイと日本をつなぐ様々な試みをTUFSウィットヤーパーンヤーンは授業の中で行っていたが、その中の1つの取り組みとして、UTCCゲウプラストゥの協力のもと、タイ国の“Blind Magazine Online”というweb媒体の作家の方々にTUFSのタイ語の授業に参画・協力頂いた。Blind Magazine Onlineとは視覚に障害のある人向けのタイ語のweb媒体であり、そのコンテンツとなる音読原稿を作成する作家の方々自身も視覚に障害を持つ方が多い。2020年度の授業の中では、そういった作家の方々へ、TUFSの学生が日本文化を紹介する企画を行った所、タイ人作家の方々に非常に好評であった。TUFSの学生からの発表体験に触発されて、作家の方々の日本への興味が深まり、現在の日本に関するタイ語のエッセイ“มอญ ยิปุ่น มุมกลับ หาย รák kwàa dæm（逆の見方で日本をみればもっと好きになる）”を「録音図書」とすることをBlind Magazine Online、UTCC、TUFSの関係者で検討を行うこととなった¹⁾。

「録音図書」とは、視覚に障害を持つ方たちが、耳で聴いて読書ができるように活字の本を朗読し、その音声を取録したものとなる。タイ国ではThailand Association of the Blindが管轄するThe National Library for the Blind and Print Disabledで、数多くの録音図書を所蔵しており、タイ国全土の視覚障害者向け図書館への貸し出し、もしくはオンラインでの公開を行っている。検討の結果、成果物をThailand Association of the Blindへ寄贈することを目的とする録音図書プロジェクトをTUFSのタイ語の授業、UTCCのStorytellingの授業のカリキュラムに組み入れることで実施することとした²⁾。それぞれの授業に組み入れることとしたのは、両大学の学生の参画を図るとともに、コロナ禍の中での国際交流活動としての側面も持たせることを目指したためである。本プロジェクトの成果物はタイ語での音声データとなることから、UTCCでラジオ制作を専門とするグリーンゲーションもプロジェクトメンバーに加わり、本プロジェクトを行うこととなった。

TUFSからの参加学生は、タイ語を第1外国語として2年以上学習している学生、つまりは学部3年生以上を想定したウィットヤーパーンヤーンが担当する科目を履修している学生10名、UTCCからの参加学生はグリーンゲーションが担当するStorytelling科目を履修する13名となった。[c]と[ch]などの有気音と無気音の対立や[r]と[l]の区別といった注意を要する子音、タイ文字の発音規則とは異なる慣用発音、文の区切り、律動、内容に即した強勢や会話とナレーションの使い分けといった音読作業特有の留意点に関する講義・演習を事前に行った後に、日本人学生とタイ人学生がペアとなって、“มอญ ยิปุ่น มุมกลับ หาย รák kwàa dæm”全編の録音を実施した。各学生ペアが録音した音声データの評価は本稿の筆者3名、及びBlind Magazine Onlineの作家5名

1) 本書の録音図書化は、出版元、及び著者の承諾を得た上で実施。

2) Acknowledgements: This work was supported by the Small Grant Program of The Japan Foundation Bangkok. I wish to thank Ms. Hatairatt JATURAWATANA, Mr. Atthawit SUKSAWAT and other writers of *Blind Magazine Online* who supported this project.

で行われ、評価結果を学生へフィードバックし、一部修正が必要な部分の再録音を行い、ファイル変換などの技術的な処理を行った後に、Thailand Association of the Blind への寄贈に至った。

1. 2. 本研究への契機

音声データの評価を行った本稿の筆者3名及び Blind Magazine Online のタイ人作家が一様に、本プロジェクトの初期段階より、TUFS の日本人学生の発音はタイ語として十分に理解はできるものの、UTCC のタイ人学生とは異なるタイ語としての聞きにくさを感じていた。個々の事象の指摘はできるものの、日本語母語話者特有の聞きにくさの要因を系統的に指摘、指導することは困難であった。

日本語母語話者のタイ語学習者の発音における課題と指導方法については、ウィッタヤーパンヤーン (2015) で考察を行っているが、そこでは学習初期段階における音節レベルでの検証に止まり、文レベルでの検証を今後の課題として位置付けていた。そこで、本プロジェクトを好機と捉え、録音図書としての評価を行った後に、同音声データを本稿の筆者3名で日本語母語話者がタイ語の文章を音読する際の発音の傾向や課題を明らかにすることを目的とした視点で分析を試みた。

前述の通り、外国語としてのタイ語教育における発音指導に関する先行研究、及び教材の中で発音方法に関するメソッドは初期段階の学習者を対象とした音節レベルの要素に焦点を当てたものが多いため、本研究では文レベルの日本語母語話者のタイ語の発音に関する課題や傾向、そしてその解決に向けた指導方法も検証し、今後の外国語としてのタイ語教育へ資するものとなることを目指している。

2. 音声データ分析方法

本プロジェクトでは“*məŋ yīpùn mǔmklàp hây rák kwàa dæm*” 全編を TUFS と UTCC の学生で分担し、音声データとしているが、本研究での分析範囲は日本語母語話者となる TUFS の学生の発話部分に限定している。かつ、対象とした音声データは、一度評価者からフィードバックを行い、修正が加えられた再録音版となる。本プロジェクトにおいて、音声データの評価に当たっては、タイ国でラジオやテレビでのアナウンス力の評価に用いられている Office of The National Broadcasting and Telecommunications Commission (NBTC) の評価基準をベースとして、ウィッタヤーパンヤーン (2015) で指摘された日本語母語話者が困難を伴う傾向が強い音節レベルでの注意点を加えた独自の評価表を開発し、評価を行った。本プロジェクトの評価項目は次の通り大きく5項目となるが、これら5項目は文レベルでの発音の分析だけでなく、録音図書としての評価も兼ねているため、本研究の目的となる分析とは直接関係しない項目もある。

評価項目の1項目は、「音節レベルでの要素」である。タイ語の音節は C1(C2)V(C3)+T から構成される(峰岸 2021, Chusri 2006)。C1 は音節初頭に来る子音となり、本稿では頭子音と呼ぶ。タイ語では音節初頭の子音連続があり、頭子音が二重子音の場合は C2 が発生することとなる。V は母音となり、タイ語には長短の対立や二重母音がある。C3 は音節末に来る子音で、本稿では末子音と呼ぶ。長母音の場合は末子音がない場合もある。そして、各音節には T で示した声調が

定められており、タイ語では5種類ある。1つ目の評価項目は、これらの要素を評価するものとなるが、全ての要素を評価するのではなく、NBTCでの評価項目となっているタイ語母語話者で間違いが起きやすい点やウィッターパンヤーノン (2015) で指摘されている日本語母語話者にとって難しい点に焦点を当てて評価を行った。具体的には、頭子音 (C1) であれば、[p]-[ph]、[t]-[th]、[c]-[ch]、[k]-[kh]といった有気音と無気音の使い分け、接近音 [w]、[y]、その他 [r] の発音や [r]-[l] の使い分け、また二重子音 (C1C2) の発音といった点に特に注目した。末子音 (C3) については、日本語母語話者にとっては使い分けが難しい傾向がある [-p]-[-t]-[-k]-[-ʔ]、及び [-m]-[-n]-[-ŋ] といった点となる。母音 (V) は長母音と短母音の使い分けや二重母音、日本語母語話者にとっては弁別的に使い分けが難しいとされる [u]、[ə]、[e]、[ɔ] に着目した。声調は日本語にはない要素であるため、正しいイントネーションとなっているか全般的に評価を行った。

2つ目の評価項目は「表現力」である。本項目では文章の内容に応じて、音の区切り、強弱、リズムなどによって構成される流暢さを評価している。個々の単語の発音の正確性だけでなく、文章で示している内容を、より聞きやすい方法で発声しているかを確認するものとなる。

3つ目の評価項目は「発音の明確さ」であるが、明確さの要素としては大きく2つある。本項目での1つ目の要素は、各単語が最後の末子音まで正しく、はっきりと発音できているか、前後の単語との不要なリエゾンが発生していないか、強調しすぎてないか、単語の音の長さは適切か等々、単語及び文としての発音が明確であるかを確認するものとなり、1つ目の項目「音節レベルでの要素」と2つ目の項目「表現力」の中に組み入れて評価を行っている。そして、2つ目の要素としては、呼吸音や空気音など、自身が発する雑音が録音されていないかという点を確認するものとなる。この2つ目の要素は音読図書プロジェクトの玉成目的で設定したもので、本稿での研究との関係性は低いものと捉えており、本項目については、1つ目の要素の分析結果のみを本研究に活用するものとする。

4つ目の評価項目は「正確さ」である。本プロジェクトは文章の音読となるため、文章通りに発音されているかを確認するものとなる。文章から逸脱し、自身の言いやすいよう独自に単語を増減させるなどの独自変更の有無やサンسكريット語などに由来する特殊な書き方をする単語を正しく読めているかなどを確認する項目となる。最後の5つ目の評価項目は「声」である。声の明るさやかすれ具合、震えといった声質や声量等の安定感を評価している。4つ目の項目「正確さ」と5つ目の項目「声」については、特に音読図書プロジェクトの玉成目的で設定されたもので、その性質から本研究との関係性は低いものと捉えている。

本研究の目的と照らし合わせ、「音節レベルでの要素」、「表現力」の2項目及びこれら2項目の中に組み込まれている「発音の明確さ」に関する評価・分析結果について、次章で見ていく。

3. 分析結果

3.1. 音節レベル

本節では、頭子音、母音、末子音、そして声調についての評価・分析を示している。まず頭子音の発音の中で、最も間違いが多く見られた事象は、[l] と発音すべき箇所を [r] で発音しているというもので、10名中5名の学生でこの間違いが発生している。震え音である [r] は、タイ語母

語話者も側面音 [l] に置き換えて発音することがよくあり、前述の NBTC の評価ポイントにも挙げられている。舌先をどこにも接触させずに、舌先を震わせて発音するタイ語の [r] は、日本語母語話者にとっては難しい調音方法であり、タイ語の [l] や日本語の [r] に代用して発音される傾向が強いという認識であった (ウィッタヤーパンヤーン 2015)。しかしながら、今回の録音データでは [r] を [l] で発音してしまうケースが発生したのは、10 名中 2 名だけであり、意外な結果であった。そして、この [l] を [r] と発音する事象が発生するケース³⁾ は、klom 「丸い」→ krom といった (1) 二重子音 [kl] の場合、läay 「様々な」→ räay といった (2) 声調が上声の場合、そして léklék 「小さい」→ rékrék といった (3) 疊語の場合に多く見られた。これらの事象が発生する要因として考えられるのは、(1) の場合、二重子音は母音を挟まず、連続して子音を発音するが、これは日本語にはない発音方法であり、子音の間に母音を入れないことに注意が向いていること、(2) の場合は、低い音から一気に高い音へと移行するためのタメが入ること、(3) の場合は同じ音を繰り返すことといった、[l] の調音以外で注意を要することがあり、無意識に口腔内に力が入ってしまい、[l] を [r] と発音している可能性が高いものと考えられる。

峰岸 (2021) では有気音と無気音の対立が日本語母語話者の課題の 1 つであると指摘しているが、今回のデータの中で観察できたものとしては tookiaw 「東京」→ thookiaw、tua 「体」→ thua、taam 「従う」→ thaam といった [t] を [th] と発音とする事象が 10 名中 3 名に見られたものの、他の有気音と無気音の対立ケースでの間違いは 2 名以下であった。[w]、[y] や [f] など、日本語母語話者には難しいと考えられている他の頭子音に関する要素についても、今回、間違いが観察できたのは 2 名以下であった。

次に母音であるが、タイ語の母音音素は 9 つあることから、5 つの母音音素を基本とする日本語を母語とするタイ語学習者は特に学習初期段階において [u]、[u]、[ə]、[ɛ]、[ə] を弁別的に捉えることに困難を伴うというのが、ウィッタヤーパンヤーン の教育現場経験からの印象でもある。しかしながら、今回の対象データの中で、母音の要素としてより課題が多かったのは、母音の長短であった。thaantron 「直接的」→ thantron、phúanbāan 「隣家」→ phúanbān など長母音を短母音に発音する間違いのケースが 9 名で確認されたのに対して、kan 「お互いに」→ kaan、hāy 「～させる」→ hāy、phráʔrɔŋ 「脇役」→ phráʔrɔŋ など、短母音を長母音に発音する間違いをしていた学生は 4 名であり、長母音を短母音化してしまうケースの方が多く見られた。日本語はタイ語の音節とは異なり、拍という CV の組み合わせの単位から構成され (Chusri 2006)、タイ語の長母音に相当する音は日本語では 2 拍相当となる。日本語とタイ語では音の単位が異なることから、日本語母語話者は長母音への意識が比較的弱い可能性がある。

末子音は日本語の中では実際には無意識で発音はされているものの、弁別的に認識されていないため、特にタイ語学習初期段階の日本語母語話者がタイ語の末子音 [-p]、[-t]、[-k]、[-ʔ] と [-m]、[-n]、[-ŋ] が区別できるようになるためにはある程度の訓練が必要とされる。今回の録音を行った学生は、殆どのケースで末子音が正しく発音できていたが、唯一 [-n] と [-ŋ] の運用においての課題が顕著であった。[-n] を [-ŋ] と発音してしまっているケースが見られた学生が 6 名、[-ŋ] を [-n] と

3) 誤った発音箇所を下線で示している。

発音してしまっているケースが見られた学生が5名確認出来た。[-n]が[-ŋ]となってしまう要因の1つとして、次音節の頭子音が影響しているケースが見られた。今回観察した範囲では、ráan kháay「売店」→ ráaŋ kháay、kòon khâw nâa fôn「雨季に入る前」→ kòon khâw nâa fôn、hên kan thúapay「一般的にみられる」→ hên kan thúapay など、次音節の頭子音が [k] や [kh] の場合に、この事象が発生しやすいように見受けられる。[-ŋ] は日本語の中では、「がんこ」、「まんが」など、「ン」の後にカ行やガ行など軟口蓋を調音点とする音が直後に続く場合、「ン」として無意識に発せられている音となる。タイ語の子音は表1に掲載した通りとなるが (ウィッタヤーパンヤーン 2015)、[k] と [kh] の調音点は、[ŋ] と同じく軟口蓋となり、次音節の頭子音の調音点が、直前の末子音に影響を及ぼしてしまっているものと考えられる。

表1: タイ語の子音

	調音点					
	両唇	唇歯	歯茎	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	p		t	c	k	?
	ph		th	ch	kh	
	b		d			
摩擦音		f	s			h
鼻音	m		n		ŋ	
側面音			l			
震え音			r			
接近音	w			y		

タイ語では次の音節の頭子音が直前の末子音へ、及び末子音が次音節の頭子音へ影響を及ぼすことは、後述の通り一部例外はあるものの原則として発生しない。一旦、末子音で切れ、次の音節の頭子音から改めて発音が形成されるのがタイ語の音節構造の基本である。一方で日本語は、音節単位で見れば、前述の「がんこ」、「まんが」が示す通り、頭子音が直前音節の末子音に影響を及ぼしている。今回、録音を行った学生は、タイ語学習の初期段階において、この末子音の発音における注意点について学習・訓練をしており、[-n]、[-ŋ] 以外の末子音では大きな課題は観察できなかったが、「末子音 = [-n] + 次音節の頭子音の調音点が軟口蓋 = [k]、[kh]、[ŋ]」の組み合わせのケースでは、この日本語の特性の影響が根強く残ってしまう傾向があるものと考えられる。

逆に [-ŋ] を [-n] と発音してしまうケースは、sǒŋ thêŋ「2本」→ sǒn thêŋ、thán nán「全て」→ thán nán、cīncīŋ léew「本当は」→ cīncīn léew などであったが、これらのケースも同様に [-n] と同一の調音点である歯茎で調音する [th]、[n]、[l] が次音節の頭子音となっており、影響を及ぼしたものと考えられる。

音節レベルでの最後の要素は声調となるが、最も間違いが見られたパターンは低声が平声となってしまう事象であり、10名中6名で確認された。「低声の平声化」は、nètñuay「疲れた」→ nètñuay、suan nuŋ「一部」→ suan nuŋ、klòŋ「箱」→ klòŋ、yàaŋ dii「ちゃんと」→ yaaŋ dii など、二重母音や長母音の場合に多く見られた。声調はタイ語の意味を決定付けるための非常に

重要な要素となるが、日本語母語話者にとってはその聴解及び発音に困難を伴っており、声調の習得のためには、様々な指導・学習方法が試みられている。特に日本語母語話者に意識させる点は、音節の中で音の高低がほぼ変化しない平声、低声、高声の段位声調となる。その中の平声については、「普通の音の高さを一定で」と説明されることが多いが、タイ語母語話者の耳では、日本語母語話者が発する「普通の高さ」が、タイ語母語話者の発する「普通の高さ」よりも若干低く感じられ、低声との境界が少々曖昧である場合が見られる (ウィッタヤーパンヤーノン 2015)。このように従来より日本語を母語とする学習者の課題とされている低声と平声の使い分けであるが、短母音よりも、二重母音や長母音の音節の方がより表れやすい可能性がある。

今回、録音を行った TUFS の学生は、基本的には日本語母語話者に難しいとされている音節レベルの個々の課題は概ね問題はないというのが、本プロジェクトの評価者全員の一致した見解であった。一方で、こういった音節レベルで大きな問題はない学習者グループにおいても、今回観察されたように間違いの傾向は類似したものとなっており、日本語母語話者に特有の間違いが起きやすい音節要素の組み合わせがあることが予測される。

3. 2. 表現力

「表現力」については、個々の単語の発音の正確性だけでなく、文章で示している内容を、より聞きやすい方法で発声し、文章の内容に応じて、音の区切り、強弱、リズムなどによって構成される流暢さを評価している。ここで特に課題となった要素は音の区切りとなる。本稿の筆者3名はタイ語母語話者であるが、この3名で評価を行った結果、10人中8人が、音の区切りに起因する何らかの課題が観察された。音の区切りの課題は、大きく4つの事象に分類される。なお、以降で示すタイ語例文の音韻表記について、タイ文字表記では単語と単語の間にスペースは表記されないが、便宜上スペースで単語の区切りを示している。また、ここでの単語の単位としては、細分化可能な意味としての最小単位ではなく、文の中でまとまった意味を有する単位としている⁴⁾。例文中の「(-)」は1つの単語内に確認できた不要と感じられる音の区切りが入ってしまっている箇所を、「(x)」は単語と単語の間で不適切と感じられる間が入り、違和感のあるテンポとなってしまっている箇所を、「()」は単語と単語や文と文の間で適切と感じられる間が入っていない箇所を、それぞれ示している。

まず、1つ目の事象は、文中の全ての音節をはっきりと区切りながら読むケースで、4名にその傾向が観察された。

例1 【正】 chûay hây sên[̂]lúat khayăay

【誤】 chûay hây sên(-)lúat kha(-)yăay

「血管を広げるのに役立つ」

2つ目の事象は、音を区切る位置や間を入れる位置が不自然であるため、意味が分かりにくく、タイ語としての聞きにくさにつながるケースが4名に見られた。例2のように1つの単語の中で不

4) 例えば phîichaay 「兄」は、phîi 「兄姉」と chaay 「男性」に分割することも可能であるが、文脈に即して phîichaay を1つの単語として扱う。

自然な位置で音が区切られており、日本語で例えるならば、「通信簿」を「通信(-)簿」といった風に発音してしまっているケースと、逆に例3のように ěem |「さらに」の前に十分な間を入れて発音した方が理解しやすい箇所での間が極端に短いといったケースも見られた。

- 例2 【正】 $\text{?aacaan banthúik khaenkhwaampraphrút}$
 【誤】 $\text{?aacaan banthúik khaen(-)khwaampraphrút}$
 「先生が通信簿を記入する」

- 例3 【正】 $\text{phró? ?aròy thěem thamhây chòokdii ?iik}$
 【誤】 $\text{phró? ?aròy()thěem thamhây chòokdii ?iik}$
 「美味しく、さらに運がよくなるから」

3つ目の事象は単語間の間が多くなることで、文が途切れ途切れに聞こえるケースとなり、3名の学生で観察された。

- 例4 【正】 $\text{samâykhòon bâanchâw sànmâak mây mii hòy?àapnám}$
 【誤】 $\text{samâykhòon(x)bâanchâw(x)sànmâak(x)mây mii(x)hòy?àapnám}$
 「昔はほとんどのアパートにお風呂はついていなかった」

4つ目の事象は文と文の間に十分な間を入れずに続けて、2つの文を続けて読んでしまうケースが2名の学生で発生していた。

- 例5 【正】 $\text{thúk satháanii cà? mii ?eekiben khây nénam hây loŋ súuu}$
 【誤】 $\text{thúk satháanii cà? mii ?eekiben()khây nénam hây loŋ súuu}$
 「全ての駅に駅弁が売られている。お勧めです」

事象1の要因としては、自身の声が公の録音図書に収録されることから、丁寧に発音することへ意識が向き過ぎ、学習の初期段階で指導されてきた音節単位での正確な発音を意識した結果が過度に出てしまった可能性があるものと考えられる。タイ語はタイ文字表記では単語間にスペースはなく、一見して区切りの位置を把握するのが難しいが、今回は録音を行うこともあり、学生は事前に自身が録音を担当するタイ語文の意味を十分に確認しており、文の意味や構造を理解していないということでないにも関わらず、事象2、3、4が発生してしまっている。かつ、これらの事象が見られた部分以外でも、半数の学生が全体的に無機質、機械的、もしくは棒読みのような印象を受けたという評価でもあった。今回のように音節レベルでの発音の基礎をほぼ習得している学習者であったとしても、文としての発音では流暢さに欠けるのは、話しことばとしてのタイ語の発音の特徴を総合的に学習していないことによるものではないかと考えている。

タイ語の話しことばには、タイ文字に定められた発音規則とは異なる慣用発音がある。Higbie & Thinsan(2003)では口語の発音で出現する単語レベルでの声調の変化や末子音が消滅する事例などが示されている他、Iwasaki & Ingkaphirom(2009)では、音節の位置によって、タイ文字の発音規則から外れ、母音の長短が変化する事例が示されている。また、Chusri(2006)では、単語レベ

ルのタイ語の慣用発音を強弱アクセント (Stress Accent) として言及しているが、Chusri(2006) は日本語教育者の視点から、日本語とタイ語の発音の違い、タイ語母語話者の日本語学習のための日本語の発音問題とその指導方法について論じるものとなっている。そして日本語で書かれた市販のタイ語学習教材には、これまで確認した限りで、その点について言及があるのは、【文字通りの発音】 náŋsǔu → 【慣用発音】 náŋsǔu 「本」といった使用頻度の高い一部の単語の事例の記載にとどまっている。話しことばとしてのタイ語は1つずつの音節としてではなく、単語や文など複数の音節を連続して耳にする機会の方が多いが、音節が連続することによって発生する特有の慣用発音があるものの、外国語としてのタイ語教育の中で、それらの説明やその指導方法はあまり明確にされていない。そのため文単位の発音の素地となるものは、各学習者のタイ語のリスニング内容の蓄積から得た感覚や指導者等からの適宜の指導といった個々の経験や感覚に基づくものが主流となるため、個人差も大きい。そこで、タイ語文の発音における流暢さをより効果的に高めていくためには、文レベルでの発音指導メソロジーを学習カリキュラムに組み入れることが有効であると考えており、次章ではその点についての考察を行っていく。

4. 日本語母語話者へのタイ語文音読指導法に関する一考察

4.1. 音節レベルでの指導法

本プロジェクトへの参加学生は、タイ語の音節レベルの発音に関する諸要素は原則習得済であるものの、一部に課題が確認された。個人の問題であれば、事象のバラつきが見られるはずだが、今回、一定の傾向が見られたことから、日本語母語話者特有の課題と捉えることは可能であり、その改善に向けた指導方法についての考察を行う。

まず、頭子音の「[l] の [r] 化」については、(1) 二重子音、(2) 上声、(3) 畳語といった場合に発生する傾向が観察された。これらのケースは、いずれも [l] の調音以外に、注意を要する要素があり、口腔内に緊張が高まっているため、同じく日本語母語話者にとって緊張を伴う調音方法となる [r] になってしまうものと予測される。[r] は舌尖をどこにも接触させずに舌尖を震わせて発音する調音方法であり、特に舌尖に緊張が伝わっているものと思われるため、(1) 二重子音、(2) 上声、(3) 畳語とともに [l] が表れる時には、特に舌尖を歯または歯茎につけるように注意を促すことが肝要となる。

次に母音における「長母音の短母音化」については、末子音がある音節の場合は、次に続く末子音の調音に意識が向いてしまったためか、末子音がない音節よりも長母音が短母音化する傾向が比較的多く見られるため、その点も留意しながら長母音の適切な長さを指導する必要がある。

末子音については、特に注意を要するのは、「[-n] の [-ŋ] 化」と「[-ŋ] の [-n] 化」であるが、これらは末子音に続く次音節の頭子音の調音点との関係性が高い。そのため、本事象が起りやすい [-n] + 頭子音 (調音点 = 軟口蓋) [k, kh, ŋ]、及び [-ŋ] + 頭子音 (調音点 = 歯茎) [t, th, d, s, n, l, r] となる組み合わせの練習を繰り返し行い、末子音と頭子音で舌の位置を確実に変えることへの慣れをより強化していくことが必要と思われる。

声調での課題は、「低声の平声化」となるが、特に二重母音や長母音でその傾向が表れやすい結果であったため、低声と平声の違いが曖昧な学習者がいる場合は、二重母音 / 長母音 + 低声の

音節が入った文を繰り返し音読させ、低声と平声の音の高さの違いをより明確に意識させる指導が必要と考える。

本稿では、間違いが多く見られたケースに焦点を当てているが、当初懸念された有気音と無気音の対立やここで挙げた以外の母音や末子音、声調の使い分けなどでは、特に全体としての傾向という程の事象は確認されなかったものの、一定の条件が重なると日本語母語話者特有の事象が表れることが確認できた。今回のデータから観察された事象はあくまで一例であるため、日本語母語話者が間違いを起しやす事例及び条件/組み合わせについて、より多くのデータを蓄積し、日本語母語話者が留意すべき点を総合的に検証することが今後は求められる。そして、蓄積された知見を文レベルでの発音指導に反映するとともに、初期段階の音節レベルの発音練習から、敢えて日本語母語話者が困難を伴う組み合わせを音節・単語レベルの事例にも織り込むことで、効果的な指導につながるものと考え。一例として、本節で指摘したポイントを織り込んだタイ語文例は練習文1～5の通りとなる。練習文の下線部が日本語母語話者で間違いが発生しやすい箇所となる。

練習文1: [l] の [r] 化対策用

lúuklāan lāy khon phl̄ə̀tphl̄ə̀n kàp kaanlāw khwaamlān mūa luŋ yaŋ léklék

「何人かの孫たちは、おじさんが小さい時の思い出を語ることを楽しんでいる。」

練習文2: 長母音の短母音化対策用

thə̀ə̀ phūut phaasāa cjin dii kwàa phaasāa ʔúuun

「彼女は他の言語より中国語が上手く話せる。」

練習文3: [-n] の [-ŋ] 化対策用

kòon khāw nāafōn khonŋaan khōŋ ráankhāy ʔə̀ppakə̀on kanfōn cáʔ khōn khōŋ ʔòok maa waan

「雨期に入る前に従業員が雨対策グッズを並べる。」

練習文4: [-ŋ] の [-n] 化対策用

cinj léew ráwāanthaan naan də̀on pay súu dinsō sōŋ thēn náʔ

「本当は途中彼女が鉛筆を2本買いに行ったんだよ。」

練習文5: 低声の平声化対策用

bānmuaŋ hēnii duulee yāndii máy mii khay thīn khayàʔ klūanklāat

「この町はちゃんと面倒がみられて、ごみを捨てる人がいない。」

4. 2. 韻律に関する指導法

文章としてのタイ語の流暢さの向上を図るためには、話しことばで特有に見られる単語や文章での発音における特徴を理解・習得する必要があるが、これは韻律と呼ばれるものとなり、筆者

が確認した限りでは、外国語としてのタイ語教育に関する研究や教材の中には、タイ語の韻律に関する記述はまだ見当たらない。タイ語の韻律 (Prosodies in Thai) については Pankhuenkhat (2011) に詳しく、その中で述べられている内容は次の通りとなる。

韻律とは、「連続で話す」、「早く話す」、「前後の文脈」、「話し手の感情」、「音節の強弱」といったことが原因となって、2音節以上の単語、句、文を発音する際、子音や母音、声調に生じる変化のことで、この韻律によってタイ語ではタイ文字に定められた通りの発音 (書き言葉の発音) と実際に話されている発音 (話しことばの発音) が異なっている。Pankhuenkhat (2011) には韻律の様々な事象の記載があるが、話しことばとしてのタイ語の流暢さを向上する目的でこれらの事象を外国語としてのタイ語教育課程の中に組み込むには、いくつかの段階に分けた方が良いと考える。

まず、第1段階に組み組んだ方が良いと考える事象⁵⁾は、「Modification of tone (声調の変更)」、「Modification of vowel quality (母音の質の変更)」、「Modification of phonemes (音素の変更)」、「声門閉鎖音 [-ʔ] の消失⁶⁾」となる。これらの事象及び具体例は、Pankhuenkhat (2011) より筆者要約で表2に示している通りであるが、一部は既に現在のタイ語教育の現場で慣用発音として指導しているものもあり、学習初期段階の教材で発音記号が表記された教材では、これらの韻律事象を反映した発音で表記されているものが見られる。ただし、タイ文字の発音規則から逸脱している理由やどういったケースでこれらの事象が発生しているかの解説が十分ではないため、学習初期段階において、これらの事象の発生要因を含めた全体像を理解することは、タイ文字の発音規則の正しい理解とともに、これらの事象が起こり得る初見のケースへの対応にも役立つかと思われる。

表2: タイ語の韻律学習 第1段階(案)⁷⁾

事象	例
Modification of tone (声調の変更) 単独でその語を話す際は、タイ文字規則に基づく発音となるが、複数の語/音節を一体となって発音する時や早く話す時に声調が変化。	dây+măy → dâymáy 「できますか？」 prâʔ+tuu → pratuu 「扉」
Modification of vowel quality (母音の質の変更) 長母音の語が他の語と一体化し複合語となることで母音が変化。	thî+nî → thînî 「ここ」 sî+khăaw → sîkhăaw 「白色」 raaw+raaw → rawraaw 「大体」
Modification of phonemes (音素の変更) 連続で話す、もしくは早く話すことで、長母音が変化。	châaŋ+máay → châaŋmáay 「大工」 khâaw+nîaw → khâawnîaw 「もち米」
声門閉鎖音 [-ʔ] の消失 2音節以上の単語で第1音節が短母音の場合、同音節の末子音 [-ʔ] が消失。それに伴い同音節の声調が低声/高声から平声に変化。	tháʔ+lee → thalee 「海」 sâʔ+ʔaat → saʔaat 「清潔な」 sùʔ+phâap → suphâap 「礼儀正しい」

5) 本稿に記した韻律事象の英語表現は Pankhuenkhat (2011) を引用したものとなる。

6) 本項目については、Pankhuenkhat (2011) に英語表現の記載がなかったため、タイ語からの日本語訳のみの記載となる。

7) 韻律による変化部に下線。

第2段階としての学習項目案は、表3の通りとなるが、「Assimilation (同化)」については、注意を要する。確かに一部の表現で直前の末子音と連続する頭子音の同化現象は慣用発音として定着しているが、タイ語の発音の基本は音節単位での独立性である。そのため、音節レベルでの発音が未習得の状態では「Assimilation(同化)」に慣れ親しんでしまうと、末子音と頭子音の発音を同化すべきではない組み合わせにおいても同化してしまう懸念もあるため、音節レベルでの発音を確実に習得した段階に組み込むことが適切であると考えられる。

表3：タイ語の韻律学習 第2段階(案)

事象	例
Assimilation(同化) 連続する語で直前の語の末子音が直後の頭子音と同じ発音へ。	yàaŋ+ní → yàaŋní 「このように」 yàaŋ+nán → yàaŋnán 「あのように」 yàaŋ+ray → yaaŋgay 「どんなふうに？」
Loss of morpheme or syllable(形態素/音節の消失) 複合語や句などを早く話す、連続で話す際、音節が消失。	phró?+chá?nán → phró?nán 「だから」 wíthayaalay → wityaalay 「短大」

第3段階としては、表4中に示した項目となる。「Prolongation of vowels (母音の延長)」については、タイ文字の正書法では表記することができないが、反対や比較、興味喚起のために、畳語を高声よりさらに高い音で発生することがあるため(nâaksakun et al. 2011)、発表やスピーチの機会などで感情を込めてタイ語文を音読することが求められる学習ステージに入った頃に、これらの事象を説明するとともに、適宜、事例を指導するのが妥当かと思われる。

表4：タイ語の韻律学習 第3段階(案)

事象	例
Prolongation of vowels (母音の延長) 畳語の第1音節を強調=声調の高声化+母音の伸長。	naannaan → náannaan 「(時間的に)長い」 dīidii → dīīidii 「良い」 khāawkhāaw-khāāawkhāaw 「白い」
Insertion of empty element (空要素の挿入) 2音節から成る複合語の間に意味のない音を加え、3音節へ。	tòk+cay → tòkkacay 「驚く」 nók+yaaj → nókkayaaj 「白鷺」

Pankhuenkhat (2011) では、他にも「Emotion of speakers (話し手の感情)」や「Stress (強勢)」といった事象についても述べている。「Emotion of speakers (話し手の感情)」について、疑問詞や小辞は、音の高低、音調、音の長短、声量などの違いによって、話し手の様々な感情を表すことができるが、一般的な文字や記号では表示できない違いとなる。そのため、文字教材での学習は難しく、会話、音声データなどによる音声による指導・学習が有効であろう。「Stress (強勢)」については、音節の種類の違いにより起きているもので、この点については、次節で述べることとする。

4.3. 重音節・軽音節

nâaksakun(2016)によると、タイ語の話しことばにおいて、音節は phayaaj nàk(重音節 stressed syllable)、phayaaj baw(軽音節 unstressed syllable)に区分され、それに基づき音節毎に強弱のアク

セントが生まれている。1音節で単語として成立するものは重音節となる。他にも終結小辞を除き、文末、句末、単語の最終音節は必ず重音節となり、重音節はタイ文字の規則に則り、発音される。それに対して、タイ語の軽音節は、原則、頭子音が二重子音ではない、もしくは二重子音で [r] を含むもの、母音が短母音で末子音が [-ʔ] のもの、そして声調が平声といった音節となる。例えば、sabaay 「快適な」、kathíʔ 「ココナッツミルク」、kracòk 「鏡」の下線部分が軽音節となる⁸⁾。一般的には重音節の前の音節は軽音節となるが、タイ文字表記では重音節が続くケースもある。その場合は、音節単体で見れば重音節だが、前後の音節との関係性次第で、nǎnsúuu → nǎnsúuu 「本」のように声調が変化、または rɔ̀ɔ̀ntháw → rɔ̀ɔ̀ntháw 「靴」のように長母音が短母音化するなど、重音節が軽音化する phayaan lót námna̋k (軽音化音節) という現象が発生する。さらに、単語内だけでなく、以下に示した文中の thəə 「あなた」のように前後の単語の音節との関係性から1音節の単語であっても軽音化することもある⁹⁾。

thəə tham yan̋ji dây yan̋jay 「あなたは どうやってこんなことができたのか」

このように重音節・軽音節は、広範に渡ってタイ語文の発音に影響を及ぼすものであるため、特に重要な要素となるが、言語学などを専門とする者以外では、重音節・軽音節自体を認知しているタイ語母語話者は極めて限られている。タイ語を母語とする者は、自然に重音節・軽音節の法則に基づき、強弱のアクセントを入れた形でのタイ語に慣れ親しんでおり、そういったタイ語文を自然に発しているため、国語としてのタイ語教育の中では重音節・軽音節に関する内容は含まれていないことが多い。これまでの外国語としてのタイ語教育は、タイ国内における国語教育からの延長となっており (ウィッタヤーパンヤーン 2017)、非タイ語母語話者向けのタイ語教育の中でも、これまであまり扱いがなかったものと考えられる。

外国語としてのタイ語教育の中で、文章レベルでの発音の向上を効果的に図っていくためには、重音節・軽音節の仕組みを理解・習得することが日本語母語話者に限らず、タイ語を母語としないタイ語学習者に極めて有用であろう。ただし、本稿で紹介している重音節・軽音節に関する内容は全体の一部で、実際はより複雑な仕組みとなっており、単に机上の学習だけでなく、段階的かつ理論と実践を効果的に織り交ぜた実践的な教授メソッドの検討が必要となってくる。

おわりに

今回分析を行ったデータは音読図書制作を兼ねていることから、10名の学生が同じタイ語文を音読したものではないが、逆に多様な文の音読データの結果から共通の課題が抽出することができた。これまであまり注目がされてこなかった日本語母語話者の話しことばとしてのタイ語の発音に関しての傾向と課題を見出すことができたのは、日本語母語話者向けのタイ語の発音指導での

8) 本文中に例として挙げている語は、表2中の「声門閉鎖音 [-ʔ] の消失」を反映した形での音韻表記となる。また、他にも諸条件があり、一例として、kithíʔ 「ギティ (人名)」 thúrian 「ドリアン」のように母音が [i] または [u] の場合は、声調が低声や高声となる軽音節もある。

9) 下線部の音節が軽音化音節となる。

次の一步に向けた大きな発見であったと捉えている。今後は、今回抽出された課題とともに、他の課題とされる仮説も織り込んだ本研究に特化した同一のタイ語文をより多くの日本語母語話者に音読してもらうことで、データを蓄積し、広範囲に日本語母語話者に見られる傾向や特徴を明らかにしておくことが必要であろう。また、文章としてのタイ語の流暢さの向上を図るための韻律や重音節・軽音節に関する規則の総合的な学習及び習得は、基本となる音節レベルの発音やタイ文字の発音規則の理解が前提となるため、それらを織り込むべき適切な学習フェーズも検討する必要がある。その際には、個々の指導者の裁量に頼るだけではなく、目安となるマイルストーンがあれば、より効果的であり、そのためにもウィットヤーパーンヤーン (2017) で強調された「外国語としてのタイ語教育」のスタンダード化も同時に検討していくことが必要と考える。

参考文献

- ウィットヤーパーンヤーン スニサー 2017「CEFRを参照とした日本人タイ語学習者向け教材に関する考察—「外国語としてのタイ語教育」スタンダード開発に向けて—」『東京外国語大学論集 no.94』, pp.169-188.
- ウィットヤーパーンヤーン スニサー 2015「日本人タイ語学習者の発音問題と指導方法に関する一考察」『東京外大東南アジア学』第20号, pp.37-55
- CHUSRI Asadayut 2006「日本語とタイ語の発音に関する対照研究」『バンコク日本文化センター日本語教育紀要』3, pp.75-85.
- 峰岸真琴 2021「音韻体系の対照と外国語教育—日本語, タイ語, カンボジア語を例として—」東京外国語大学国際日本研究センター『日本語・日本学研究』第11号, pp.23-40
- 峰岸真琴 2012「タイ語の「行く・来る」」『東南アジア大陸部諸言語の「行く・来る」』東南アジア諸言語研究会編 慶應義塾大学言語文化研究所, pp.211-212
- James HIGBIE, Snea THINSAN 2003. “*Thai reference grammar : the structure of spoken Thai*,” Bangkok, Orchid Press.
- Shoichi IWASAKI, Preeya INGKAPHIROM 2009. “*A Reference Grammar of Thai*,” Cambridge, Cambridge University Press.
- กาญจนา นาคสกุล kaancanaa nâaksakun 2016, “ระบบเสียงภาษาไทย,” Bangkok, Chulalongkorn University Press.
- กาญจนา นาคสกุล kaancanaa nâaksakun et al. 2011, “บรรทัดฐานภาษาไทย เล่ม 1 ระบบเสียง อักษรไทย,” Bangkok, โรงพิมพ์สกลศ.
- Ruengdet PANKHUENKHAT 2011 “ภาษาศาสตร์ภาษาไทย THAI LINGUISTICS,” Bangkok, Mahachulalongkornrajavidyalaya Press.
- Sunisa SAITO 2021, “มองญี่ปุ่นมุมกลับให้รักกว่าเดิม,” Bangkok, Nation Book
- สมพงษ์ วิทย์ศักดิ์พันธุ์ sômphonj witthayásâkphan 2006, “การสอนภาษาไทยในฐานะภาษาต่างประเทศ” วรรณวิทัศน์ 5: 215-261